

自由な発想で楽しい音楽を 全く新しいトロンボーン・カルテットの誕生

来る4月26日に東京・第一生命ホールでNONAKAトロンボーン・ドリムコンサートが開催されるが、それはまさしくドリムという名にふさわしいものだ。というのも、1部のスコット・ハートマンに次いで2部に登場するのが、ジャズからJ・POPまで幅広いジャンルで活躍する村田陽一、NHK交響楽団の池上亘、東京都交響楽団の古賀慎治、そしてフリーで活躍する篠崎卓美の各氏という異色の顔ぶれによるカルテットなのだ。今回は、メンバーの村田陽一氏と池上亘氏にお話をうかがった。

4月26日のコンサートは
まさにドリム!!

4月のコンサートでいよいよ新しいカルテットが始動しますが、そもそも今回はどういういきさつで?

池上 実は、村田さんをまじえてやりた
いというのは、古賀さんと僕の長らくの
作戦だったんです(笑)。

村田 僕も話をもらって即答しました。
でも、このメンバーでなければカルテッ
トには全く興味がなかったんです。カル
テットというのは、管楽器のアンサンブ

ルの中でもポピュラーな形態ですよ。
日本のクラシック界にもたくさんある
し、世界的にも多い。ジャズのフィール
ドでも、4トロンボーンという形態はわ
りとポピュラーなんです。でも、これま
ではいいなと思えるものがほとんどな
かったし、守備範囲が狭い感じもする

し、1ホーンでソリス
トとしてやったほうが
機動力もあるし、自分
の表現がストレートに
出るからいいと思って
たんです。でも古賀君
は同い年ということも
あってすごく気が合う
し、池上君には学生の
頃からレコーディング
にきてもらったりして
いたので、どういう性
格でどういう演奏をす
る人なのか、よくわか
ってた。非常に柔軟
でフレキシブルな考え
方ができる人たちだか
ら、その彼らがこうい
うことをしてくれる
のなら、それは、これ

までのような保守的なものを作ろうとい
うことではなく、自由な発想で作ろうと
いうことなんだなと思って、じゃあやる
うと!

どんなものになりそうですか?

村田 まだ、あれやってみて、これやっ
てみて感じてですね。

池上 ええ。模索中です。ただ、アレ
ンジはすべて村田さんをお願いしていま
す。

村田 みんなと話し合った結果、今回
は、このコンサートのこのプログラムに
いちばんフィットするということでも、100%
僕のオリジナル・アレンジでやってみよ
うということになっていきます。あとの3
人がクラシックのプロなので、僕がクラ
シックを勉強するという意味でもクラ
シックもやってみてほしいなとは思って
ますが、いわゆるこのカルテットもや
るようなおはこをそのままの解釈でやる
のはあまり……。多分、今回のカルテッ
トは、世界でもあまり例のないアンサン
ブルになると思います。ジャズ的な要素
がありつつ、クラシカルなものも兼ね備
えているという点や、クラシックのアプ
ローチにはない作品を取りあげるとい
う点、かつてない切り口なので。

池上 僕らが集まっている理由がまさに
それ。今までの流れで伝統的なものを吹
く方々がいれば、当然そうではない流れ
で模索していく者がいてもいい。

具体的な選曲案があがっていますね。
村田 ええ。一応その曲目を練習してい
ますが、僕らの最大のメリットが書き手
が中にあるということなので、これから
もどんどんふくらませていく可能性はあ
ります。現に、今も練習しながらどんど
ん変えているんですよ。プレイヤーに
フィットする形で変える部分もあるし、

池上亘 (いけがみこう)
NHK交響楽団トロンボーン奏者。国立音楽大学講師。埼玉県蕨市出身。蕨少年
合唱団、蕨二中吹奏楽部、埼玉県立川口高校吹奏楽部、東京芸術大学音楽学部、
東京シティフィルハーモニック管弦楽団、東京交響楽団を経て現職。

具体的には、

具体的な選曲案があがっていますね。



村田陽一（むらたよういち）
1963年、静岡県生まれ。管楽器とドラムスのみによる編成の「村田陽一 Solid Brass」を主宰するほか、リーダーバンドとして「Hook Up」「村田陽一オーケストラ」などがあ
る。一方、アレンジャー、プロデューサーとしてさまざまなアーティストに作品を提供し
ている。クラシック界においても委嘱作品を提供。最新ソロ・アルバムは第9目になる
『ABSOLUTE TIMES』（ビクターエンタテインメント）。

ここでソロしてみようとトライする形で
変える部分もあるし。

1部に出演するハートマンとは？

池上 ハートマンはセンスもあるし、僕
らと共通のエッセンスも持っていますか
ら、多分一緒に吹けるんじゃないかな。

今回のコンサートは新しいものを見
せていただけそうで、楽しみです。

村田 楽しいと思いますよ。

池上 絶対に楽しいと思います。若いブ
レイヤーが聴いて、「あ、あれやりたいな」
と思えるような、それくらい身近な魅力
を感じてもらえればうれしいです
ね。「カッコいいな」でもいい。そんな軽
い感動からすべては始まっていくので
……。今回は、きつとそんなふうと思っ
ていただけると幸いです。

村田 若いブレイヤーに言いたいのは、
ふだん聴いている洋楽やJ・POPと
いったものと、自分がやっている吹奏

楽、トロンボーンを演奏するということ
を同列に見てほしいということ。テレビ
やラジオのチャートにのぼる音楽は聞く
もの、ふだんやっている音楽は演奏する
もの、そんな尺度で見ないでほしいん
です。僕はジャズとかポップスの側にいま
すけど、そういう人間が、今回のように
積極的にクラシックの人たちとアプロ
チすることで、そういう垣根がどんど
なくなればいいと思うんです。若いブレ
イヤーの皆さんには、ぜひ、自分がやっ
ていることは、ふだん聞くポップスと同
じ音楽で同列なんだということ、きち
んと認識してほしいですね。

その先の楽しみを教えてください バック36Bという選択

今回のコンサートで村田さんはバツ

クの中細管36Bを吹か
れるそうです。

村田 ええ。ふだんは
細管のLT8を使っ
ているんですが、年明け
早々吹奏楽をバツクに
ソロを吹くというホ
ール・レコーディングが
あったんです。普段の
レコーディングはすく
そのマイクにフォー
カスして吹くことが多
いんですが、今回は
ホールのひびきを通し
てになるので、細管よ
り太管のほうがいいだ
ろうと。完全な太管の
42という選択もあつた
んですが、よりソリス
ティックな要素がほし
かったのと、スモール
ポアからのスイッチと
いうことで36Bに決め
ました。でも、そもそも14年くらい前に
出した自分のアルバムはすべて36で吹い
てるんですよ。

それは？

村田 ふくよかな音がほしいなと思っ
たときに、仕事でいったニューヨーク
で36を見つけて、すごく気に入って吹
いていたんです。だから、36の良さは自分
の中でよくわかっていたんです。

池上 デビューの頃ですよ。僕が最初に
村田さんを知った頃は36だったから。

村田 そう、変わり者だったんですよ。
ね。

池上 その頃は単なるトロンボーン少
年で、村田さんのおっかけだったんで
す。当時36を使っていた村田さんがかっ
こよかったんですよ。見た目はもちろ
ん、自分を通して共感できるころも
あつて。ある程度タイトな中でニュー
アスをすくくいっばい出せる楽器なんだ

なあと思つて、そんなふうに使ひこなせ
たらいいなあと思つてました。

村田 池上君も以前36を使つてたよ
ね。

池上 はい。実はちよつとマネを（笑）

村田 スタジオに来てもらったときに池
上君が36を持つて、クラシックの人は
もれなく太管だと思つていたので、驚い
てはいたんですが。

池上 僕は36は、バツクの中でいちばん
スタンダード、ど真ん中の楽器だし、充
分クラシックの範囲だと思つています。
ただ今のオケはホールがすく大きいの
で、42を吹いています。

最近、吹奏楽の世界でも太め太め
を選ぶ傾向があるようですが。

池上 36を使つたほうがいい人が8割は
いるんじゃないかな。42を吹いていても
実際には使ひこなせていない人が大半だ
と思います。トロンボーンに限らず、大
きな楽器で音を出すことに一所懸命だ
と、楽器をマスターすると、その楽器
で何かを表現するところまで至れな
いんですよ。だから、できれば身体のサ
イズに合う36を使つて、トロンボーンを
吹くということをしつかりマスターし、
その先の楽しみを知つてほしいですね。

村田 ジャズでもシルバー・ソニックを
使いたがる子がものすごく多い。でも、
吹かせてみるとやめとけばつて子がほと
んど。きついですよ。しかも実りがな
いきつさ。もつと楽な、自分が吹いて楽
しい楽器を選べばいいんじゃないのか
な。多分、根拠のないイメージに縛られ
てるんだと思います。

池上 漠然と、太管なら「豊かな音」「太
い音」がするだろうと思ひこんでいるの
でしょうね、言葉のイメージ。実際に
自分の中にその音をイメージできている
かはちよつと疑問です。それに向かっ
ているという気持ちだけで満足してしま
つて、音を出したその先で何かをやるつ
て、音を出したその先で何かをやるつ
て、音がでない。とはいっても、僕の場合
は42が自分を育ててくれると思つていま



し、大変な楽器に鍛えられるという側面もありますから、絶対に36を使うべきだとはいえません。ただ、フィットしていない人が多いのは確かだし、思いこみだけで太管を選ばないでほしいんです。

上達するといつ目的ではどつですか？

池上 人によりけりですが、36を吹いたほうが上達するといふ人が大多数でしょうね。僕の友人というか、同じエリアの人の中にも、今は42を吹いているけれど36で育ったという人はたくさんいます。

ジャズとクラシック めざす音色の到達点は同じ

プロの場合、ジャンルによって吹く楽器を変えたりもしますね。

村田 確かに、ジャンルによってそれぞれの語法、ジャズにはジャズのしゃべり口、クラシックにはクラシックのしゃべり方があります。同じジャンルでやっていくときに共通言語として、こういうときにはこういうしゃべり方をしよう、こういう音色を出そうというニュアンスです。たとえばサクスの場合は、クラシックとジャズでそれが極端に違います。しゃべり方も違うし、良いとされる音も全然違う。クラシックの場合は弦楽器のようなしなやかさを求められているし、ジャズは音が割れてバサバサでもそれはそれでいい。となると楽器のチョイスが違うのも当然で、クラシック・プレイヤーはわりと新しい楽器を好むし、ジャズ・プレイヤーは極めてオールドなものを選ぶ。でも、トロンボーンに関してはそこまでの差はありません。なぜなら、語法は違っても、めざしている音色の到達点は同じだと思っんですよ。

池上 確かにそうですね。

村田 ただクラシックとほかのものといふふうには大胆にジャンル分けした場合、クラシックではないそれ以外のものの語法はたくさんあるので、許される音色もたくさんあるという違いはあります。だから、36はもちろんです、42でジャズをやってもいい。実は、アメリカ人なんて、ラー・ジ・ボアでジャズを吹く人はいっぱいいるんですよ。

マウスピースの選択については？

池上 これも一時期変な定説があつてほとんど大きくなる傾向がありました。さすがにそんな無茶は下火になりました（笑）。ちょっとした噂や人の意見で決めちゃいけないのは楽器も本体も同じで

す。自分がめざす音、めざす音楽でチョイスしてほしいですね。

村田 ちなみに僕は細管のテナーは11Cを使っているんですが、小さいのを使っているんだねって言われることがありますが、確かに11Cは数字的には小さいけれど、僕には7Cと比べても大きく感じられる。歯並びやエッジも関係しますから、大きな感じ方は人によって違う。だから数字で判断するのはすごくわかり。実際に吹いてみるのがいちばんです。

ところで、若いプレイヤーになにか。村田 ジャズを逃げ道にしないでください。（笑）

池上 えー？ 僕の時代は逃げ道なんかじゃなかったですよ。

村田 いやいやいや。でも、今の若い人の中にはわりとイージーに考える人が多いんですよ。僕は弟子をとらないんですけど、それでも何人かどうしても見てほしいって人がきたときに吹いてもらって、これ受験科目だろうみたいな曲が吹けない。話をきくと、オケとかクラシックへの道が閉ざされたからこつちへって思っただよう。そういう人には一応クラシックはきちんとやっただほうがいいよって話します。楽器を演奏する場合のテクニカルな部分はクラシックもジャズも共通ですから。ジャズでもきちんとベーシックを持った人が増えるといいなと思います。

池上 ジャズ・プレイヤーには、クラシックなんて足下にも及ばないくらい真面目な人が多いですね。

村田 アドリブをするという部分で、自分でフレーズを組み立てていくということに対してはそうなりますが、逆にいうと、その手前の楽器を演奏する部分に関してはクラシックがかなり優勢だと思います。音楽を表現するうえで、言葉は違っても、楽器のコントロールができないと話になりませんが、日本の音楽界を



BACH
テナーバストロンボーン

36B
B /F ベル=8" or 8 1/2" ポア=13.34 mm
ラッカー(GL)
ゴールドブラスベル (GB)

36BO
B /F ベル=8" or 8 1/2" ポア=13.34 mm
ラッカー(GL)
ゴールドブラスベル (GB)

見渡してみると、古賀君とか池上君とか、すごく魅力的な楽器をマスターしている人たちがクラシック側に多い。だから、自分の音色を手エックする、コントロールの具合を見るという意味でも、今回のカルテットに参加できてすごい得をしているなと思います。

池上 僕は村田さんに、自分を聴かせるということをお願い出させていただきます。クラシックの場合はまず曲ありきで、その曲を演奏した先任者もいっばいいて、その曲をやることに神経がいつてしまつて、自分というより先に他の何かが見えてきちゃうんですよ。でも、このごろ、やっぱり自分は自分なんだなつて思うようになってきました。

異色のメンバーによるカルテットを楽しみにしています。本日はありがとうございました。